「ないものねだり」より「あるもの活かし」

前　校長　多々納　雄二

個人的に、受験等において用いる「頑張る」「勉強」といった言葉は好まない。ともに、余裕や余白の要素が薄く、半ば強制するニュアンスが強いからだ。「頑なに（気を）張る」のも時には必要だが、一夜漬けでは太刀打ちならぬ受験なるものに対しては、長期に続けるのには無理がある。一方で、ＧＲＩＴｉｚｍノートに記された「我武者羅になれ」は「目前のことに一心不乱に取り組もう」とのメッセージが伝わり、勇気づけられる。「勉め強いる」のもいただけない。「学び習う」のはわかる喜びや楽しさを伴う行為だが、過度にやらされ、自らを追い込むのが当然のごとき「勉強」に、学び得る喜びを求めるのは困難ではなかろうか。「受験学習」なる言葉はないが、受験にあっても学習する姿勢を貫くと、日々前進・成長していくイメージが柔らかく伝わってくる。ぜひとも我武者羅に日々学習する自分でありたい。

そもそも受験とは何か。合格するとはどういうことか。原義・本質から考えたい。

高校を通過点とする生涯の学習履歴やその成果を「験（しるし）」とし、それをもって志願先からの評価を受けるのが「受験」。「生涯の」とした通り、幼少期から義務教育にかけて蓄積した学力を基盤に、高校で更に培養・発展させた学力が評価対象。また、履歴と記したが、実際には試験当日の成果がより重視され、いかに履歴が優れ濃密であっても、当日に発揮・表現されない限りは評価されないのが現実。合格についても、志願先の求める資格に合致しているか、定員枠に入るレベルか否かが判定基準であり、人生の履歴や努力の度合いを短時間で詳らかに精査できない以上、当日の成果こそが判定の主要素となる。つまり、生涯にわたる日常の学習の積み重ねがしっかりとその機に顕れることが重要で、それをもって相手方に評価を委ねるしかないのが受験、そして結果としての合格なのである。だから、受験での合格は、一朝一夕に、また偶然に運良く得られるような易きものではなく、まさに「途」がごとき日常の積み重ねをもって必然に成し遂げられるものといえよう。仮に「幸運にも合格した」という者があっても、長いスパンで突き詰めて精査すれば、さもありなんと納得できる途（経緯）があるに違いない。世に言う「一発勝負」は基本的に不可能なのが受験・合格である。

では、受験にどう対処すればいいのか、正しい合格の途は何か、明解な答え、唯一解なるものが存在しないのはきっと誰にもわかるだろう。一方で、答えがほしい、楽に合格したいといった気持ちもわかる。でも残念ながら、そんな答えはどこにもないのである。そうはいっても、実際に合格していく人がいて、難関大学等に毎年多くの合格者を出す学校が存在するのだから、合格に近づく方法や道程はきっとあるはずだ。名だたる進学校のやり方を倣え、それも一手かもしれない。しかしながら、学校毎に構成集団や置かれた環境、目指すところや重視するモノが異なる以上、単なる模倣が通用しないのは歴然。ならば、同質、少なくともかなり似通った状況にある、身近な事例群を参考にするのが得策であろう。それも、顔や声まで思い起こせる「あの人」からの好意的な助言付きメッセージほど参考になるものはない。「あの時に○○すればよい」、「その時に□□したら成功（或いは失敗）した」「こんな時は△△するのがベター」等、未来が目に浮かぶような助言ほど価値あるものはない。誰もが通る身近な「途」に関するモノなら尚更だろう。

今年も、受験生有志の寄稿による本冊が刊行できるのは喜びに堪えない。執筆者の中には、「ぜひとも書きたかった」「書けるのは光栄」「後輩に伝えたい」等の有り難い思いを綴ってくれている者も多い。出雲高校で学んだ者でなければわかり合えないこともきっと多かろう。卒期を跨ぎつなぐ絆、高校生活の貴重な「証」集、一種の「受験参考書」ともいえるのが本冊である。出雲の地で学び育ち、出雲高校で学力を更に培い、受験を経て合格を獲得した彼らが辿った途は、十人十色、多種多様である。出発点（意欲の面では着火点）、転換点（本気になった転機）、終着点（希望実現地等）はそれぞれであるし、環境（家庭状況、主たる学習場所、同志や仲間・支援者の存在等）も異なれば、方法（重点教科・科目、使用教材、学習時間帯等）も異なる。恐らく同様のものはあっても同一の途はないはずだ。ただし、共通点は数多くある。「ないものはない」と割り切り、誰かにねだるのではなく、「ないなら創り出せばいい」と覚悟を決め、蓄え身につけたモノ（学力等）や現実にあるモノ（ＧＲＩＴｉｚｍノート・一次得点・同志や仲間・先生・支援者・学校等）を存分に活かそうとする姿勢、そしてそれを日常に落とし込めば込むほど近づいた合格とその過程としての途。出雲高校生にこそ一読してほしい受験必読書、それが「合格への途」である。